

令和4年度 調布市立石原小学校 学校評価報告書（学校長 江原 幸一）

学校の教育目標
（１）根気よく学ぶ子（今年度の重点）・・・主体的に学ぶ意欲をもち、自らを高めようとする。（問題解決力，判断力）
（２）明るく元気な子・・・心身を鍛え，前向きに生活する。（体力，学習への意欲）
（３）なかよく助け合う子・・・自分と他者の生命や個性を尊重し，人間関係を築く。（コミュニケーション力）
目指す学校像(ビジョン) 例）学校像, 教員像, 児童・生徒像
「子どもたち一人一人を大切にする学校」（子どもたちが安心して過ごせる、温かみのある学校）

調布市立学校における共通した領域 ＜短期的な経営目標＞						
	1 豊かな心(徳)		2 確かな学力(知)		3 健やかな体(体)	
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① いじめアンケートの実施（年５回）	A	① 学習アンケートの実施（年３回）	B	① 休み時間の外遊びの励行	A
	② あいさつの励行と先言後礼の定着	B	② 家庭学習の定着	A	③ 食物アレルギーへの対応と残菜を減らす。	B
	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価
	① アンケートの実施による内容の聞き取りと対応を迅速に行ったため、大きなトラブルに発展することはなかった。	A	① 各学期のアンケートでは、「学校が楽しい」とする児童が約７０％であった。	A	① おおむね９５％以上の子どもたちが、休み時時間には外遊びをする姿がある。（委員会等の役割のある子は除く）	A
	② 前言後令は定着しているが、あいさつは個々に弱い児童がおり固定化されている。	B	② 一人一台タブレット端末の導入により約９０％以上の定着が見られる。	A	② 食物アレルギーに関するヒヤリハットは０件、毎日の残菜の量は昨年同様９０リットル程度である。	B
学校関係者評価	子どもたちの間で起こるいじめには十分注意して見守ってほしい。大人には分からないところで起きている場合もある。深刻ないじめが起きていないようなので安心している。これからも保護者と先生方で十分連携して見てほしい。		新型コロナウイルスの影響はあったものの、おおむね行事ができたのはよかった。オリンピック・パラリンピックのレガシーを積極的に取り入れた授業があるようなので、続けてほしい。ダンスはみんな好きなようだ。		子どもたちは休み時間、校庭でよく遊んでいる姿が見られる。先生方も意識的に校庭に出ていてほほえましい。給食はおいしいと評判である。図書との連携など、献立に工夫があって良い。アレルギー対応も引き続きしっかりと。。	
学校の特色を生かした領域 ＜短期的な経営目標＞						
	4 特別支援教育		5 キャリア教育		6 新型ウィルス対策	
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① 通級指導並びに個別指導の充実。	A	① その道のプロフェッショナルを招聘した授業（年３回）。	A	① マスク着用、手洗いの励行、３密の回避による教育活動の実施。	
	② 都立特別支援学校との交流活動	A	② 小中連携による交流活動・授業(年２回)	A	② 風評や差別の防止	
	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価
	① 適切な退級率はおおむね 100％を実現。日本語指導教員による個別指導は週 2 5 時間実施できた。	A	①ヒップホップダンスの専門家や音楽家などプロフェッショナルを招聘しての活動を年４回実施し、子どもたちの心に大きな影響を与えた。	A	①密を回避した教育活動と飛沫感染に対策を講じた教育活動を常として行ってきた。児童の感染は複数名の感染が確認され、学級閉鎖を実施し、感染拡大防止に努めた。	B
	②都立調布特別支援学校の児童と３年生、都立大塚ろう学校 6 年生の副籍児童との直接交流を実現し、充実した活動ができた。	A	② 2 学期に調布中学校の先生による出前授業を行うことができた、中学校生活を全員が楽しみにしている。	A	③ 教職員並びに子どもたち一人一人の人権意識を啓発し、差別等の被害を極力抑えることに努めていった。	B
学校関係者評価	個々の課題に応じた通級指導や個別の指導を今後とも続けてほしい。都立調布特別支援学校の児童たち、都立のろう学校の児童と直接交流できたことは素晴らしいことだと思う。来年以降もぜひとも続けてほしい。		その道のプロから体験することは意義深い。音楽の鑑賞など、子どもたちの心に大きく記憶として残るであろう。録音で聞くのと直接生の演奏を聴くのとでは、感性に大きな違いがある。		子どもたちに新型コロナウイルスやインフルエンザに感染しないように配慮しながら、しっかり取り組んでもらっている。２学期３学期はほぼ変更なく実施できていてよかったと感じる。	

人材育成・組織運営	
自己評価	【若手教員育成】①若手（採用４年目まで）と主任クラスをペアで組織をつくったため、効果的な育成が図られた。 ②校内ミニ研修(15:30-15:45)を１０回行い、学習指導・生活指導・校務処理などの問題解決や相互研鑽を行うことができた。 ③人間性を豊かにするためにその道のプロ２名の招聘を行い、職員自身の感性を刺激し、視野や見聞を広めることができた。 【中堅教員の育成】①校務分掌において、一人一役主任（リーダー）に位置付け、自覚と経験を積ませるようにしたため育成には効果的であった。 【円滑な組織運営】①PDCA サイクルをもとに、改善すべき点は年度末を待たずに順次改善を図った。（木曜夕会の中止の前倒し等） ②年度末の学校評価では、教員一人一人の学校経営への参画意識をもたせるために、今年度も各分掌で改善案を出させるようにした。参画意識はおのずと高まったととらえている。

学校関係者評価	○今年度も新型コロナウイルス感染症への対策を講じながらの学校運営であり、行事などは規模などを縮小しながら行ったが、オリンピック。パラリンピック教育では、現役の選手を招聘して有意義な活動が実施できてよかった。 ○教員のなり手不足が報道されている。本校は若手教員の育成体制、研修体制が充実していて良い。特にメンタル面で不調をきたす先生方が全国的にも多いようなので、若手の先生方へのバックアップ体制をしっかりとお願いしたい。 ○全国的にも不登校の子どもたちが増えている。家庭でも子どもたちとのかかわり方に気を付けていくべきだと思う。 ○これまで同様、学校と地域との良い関係性を続けていきたい。 ○マスクの扱い方が変わるようだが、それは良いことだと思う。やはりマスクをしていると表情が読みづらいので、コミュニケーションの力の育ちにもかかわってきそうである。
---------	---

中期的な経営目標の達成状況	
1	教職員一人一人の人権感覚を豊かにするとともに全教育活動を通して人権教育を徹底し、児童の自立心と思いやりの心をはぐくむことにより、いじめや不登校等の問題行動の未然防止・早期発見に努める。 → いじめ等の問題行動の未然防止・早期発見はおおむね達成できたと感じている。しかしながら、今年度は高学年を中心に不登校の児童が増えてしまった。様々な要因が考えられるが、子どもたちにとって、学校が「居心地の良い場所」となるよう、教職員一人一人が意識して取り組んでいく必要を感じた。
2	学習指導要領の趣旨を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」を柱に、タブレット端末を活用し学習に興味や関心をもたせ、人や事象との対話・対話的活動を通して自らの考えを広げ深めたり、新たな問題を見出し解決したりする授業改善を推進していく。 → 新型コロナウイルス感染症の影響で「対話する授業」は十分には行うことができなかったが、児童（４～６年生）の学校アンケート「授業は分かりやすく楽しいですか。」の質問に対して、約８割以上の児童が肯定的な回答をしており、「主体的な学び」については、おおむね達成できたと考えている。また、「個別最適な学び」については一人一人の学びのペースを大切に考え、教師が教え込まないように授業改善を進めているところである。
3	通級指導教室の拠点校として、校内通級教室の環境を整備・活用し、一人一人の教育的ニーズに応じた指導内容・方法の充実を図る。 → 通級指導教員８名の連携はよく、チームとして教育目標をおおむね達成できた。また指導教室内の「構造化」も研究し取り入れることができた。
4	全教職員が組織の一員として協働し相互研鑽することを目指すとともに、「報連相」を確実に行之い参画意識のある組織体としての教育活動を行う。 → 新型コロナウイルス感染症など、様々な社会情勢における困難な課題が多く存在していたが、教職員は一致団結し困難を乗り越えることができたと感じている。ＩＣＴの活用に関しては、タブレット端末の活用と「書く力の育成」の両面をバランスよく指導していく必要を感じた。次第に子どもたちが字を書くことに抵抗を感じたり拒否したりし始めているところがある。
次年度の重点課題	
◎ 学習指導要領で育成すべき資質・能力の三つの柱「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」のうち、特に「確かな学力」（知識及び技能が習得されるようにすること）に重点を置き、「学びへの主体性」をはぐくむ教育活動にあたる。その際、タブレット端末などのＩＣＴ機器を積極的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」を柱に、学習に興味や関心をもたせ対話的活動を通して自らの考えを広げ深めたり、新たな問題を見出して解決したりする授業が構築できるよう、日々の改善をより一層推進していく。一方、文字等を書く力も見逃せないため、その両面をバランスよく指導していく必要がある。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を推進する。 ◎ 情報リテラシーに関しては、子どもたちが「得た情報」を主体的にとらえ自ら考え活用し、他の人たちと協働できるようにするための「情報活用能力」の育成に努める。そのうえで、ＩＣＴ機器の扱い等における情報モラル教育を充実させ、ＳＮＳ等の情報発信のルールや危険性を指導し、安全に情報機器を活用する知識や技能、情報活用能力を身に付けさせる。 ◎ 児童並びに教師自身の言葉遣いなどの言語環境を整え、不登校を未然に防ぐための魅力ある学校づくり（子どもたちにとって学校が居心地の良い場所となること）を推し進め、温かい人間関係を構築する。	